



「浴火鳳凰(よっかほうおう)-Phoenix From The Flames」  
(王文志(ワンウェンチー)氏)(愛称:バンブーハウス)  
試練を乗り越え再生を願うため、平成24年3月11日から約1カ月  
かけ、市民ボランティアと制作。昼と夜では違った表情を見せる。  
Photo(2点共に):村井 勇



# 訪れたいまち

## 第16回 新潟県新潟市

信濃川と阿賀野川。この2つの大河と日本海が出会う新潟市で行われている「開港都市にいがた 水と土の芸術祭2012」(会期7月14日～12月24日)。芸術祭を通して新潟市の歴史に触れた。



### 水と土とは

「新潟」＝「美味しいお米」と思う方は多いのではないだろうか。しかしその昔、新潟のお米は「鳥またぎ米」(鳥さえも食わずにまたいで通るまじい米)と呼ばれていた。

新潟はもともと海の底にあった。信濃川や阿賀野川などの川が運んだ土砂が、海や風の影響を受け堆積し、形成された。

内陸部は、1950年代前半までほとんどが湿地であった。かつては「地図にない湖」と言われるほど。人々は水の引かない田で、ひどいところでは、腰ではなく胸まで泥水に浸かりながら年中農作業を強いられた。過酷な環境で作られた米は、著しく品質の低いものだった。さらに、大雨のたびに川が氾濫し、土砂水害を繰り返す。3年に1度しか米がとれないとまで言われていた。

この状況を改善するために、分水路や河道改修が行われる。1948年には当時東洋一の能力を誇った排水機場も作られ、治水を維持し、徐々に乾田化していく。今では「美田」と言われている越後平野の水田地帯は、我々の何代か前のつい最近まで、水と土との闘いを繰り返していた。「この水と土との関わりこそ新潟市の独自性です」と語るのは、水と土の芸術祭のプロデューサーである小川弘幸氏。



小川弘幸氏  
「水と土の芸術祭2012」プロデューサー。新潟市生まれ、同市在住。後ろに見えるのは新潟の海を象徴する「テトラポット」を重ね合わせた作品。新潟市の海岸は浸食が激しいため、テトラポットを設置している。

「新潟市は、2005年の合併で大きくなりました。合併する前の市町村と今の新潟市を貫くものは何か、と考えた時、水と土との成り立ちではないか、というところに行き着きました」

市民から文化を活用した事業で町おこしをという要望もあり、「水と土の文化都市にいがた」を国内外に発信しようということで、水と土の芸術祭を開催することになる。

### 3つの柱

「3つの柱で構成しているところが、芸術祭の特徴です」

1つ目の柱はアートプロジェクト。招聘と公募で選ばれた国内外の約60組の作家による作品を市内各地で展示。展示場所については、作家を新潟に招待し、水の記憶、土の匂いの残る場所を案内。そして「ここだ」という場所を見つけてもらい、作品を制作した。作品によっては市民の手も借



## ①「レクイエム」のための茶室と舞台(坂爪勝幸氏)

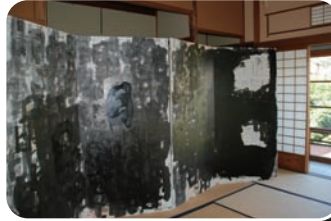


茶室と極小の舞台を庭に展示することで複合的芸術空間を作り出す。

**安吾 風の館**  
大正時代に建てられた旧市長公舎。新潟市出身の作家・坂口安吾の原稿などを展示。



## ②「日 / 記」(華雪氏)



書家・華雪氏が「日」を書きし続けたもの(「日」は歌人・會津八一の書いた新潟日報の題字から)。

**北方文化博物館新潟分館**  
越後随一の大地主豪農・伊藤家の別邸。後に八一が晩年を過ごした。現在は八一の歌書や越後出身の俳人・書家である良寛の書などを展示。



## ③「旧齊藤家別邸における Notice-Forest インスタレーション」(照屋勇賢氏)

紙袋の中しなやかで強いが繊細な木を組み立てた。背後に見える本物の木との融合も。



**旧齊藤家別邸**  
新潟三大財閥の1つ。大正時代建築。見事な回遊式庭園は完成までに3年かかったと言われる。まちなかに潜む別天地。



## みなとオアシス新潟

**信濃川左岸緑地** 遊歩道にアートが展示されている。



「GOLDEN ZERO」(藤江竜太郎氏)

「Heart washing room-こころの洗濯」(佐藤仁美氏)



### みなとぴあ

明治から昭和を代表する洋風建築で構成された歴史文化ゾーン。旧新潟税関庁舎や歴史博物館など。なかでも旧第四銀行を移築した「ぼるとカーブドッチ」(写真)は異国情緒漂うレストラン。記念日などにも良い。

上記のほか、入船みなとタワー・山の下みなとタワー・佐渡汽船ターミナル・朱鷺メッセ・ピアBandai・万代島緑地が登録されている。

### ●みなとオアシス制度

「みなと」の施設を活用し、地域振興に係る取り組みが継続的に行われる区域を登録し、みなとや地域の魅力を全国に発信する。みなとまちづくりを応援し、来訪者の利便性の向上を図るもの。平成24年9月1日現在66カ所登録。



今回訪れたのは「新潟島」と「万代島」地区の一部。万代島は新潟駅から徒歩圏内。新潟島はレンタサイクルで回るのがお勧め。このほか、海辺や川辺、古い米倉庫などに展示された作品が市内各所に点在する。郊外を巡るアート鑑賞バスツアーに参加すれば新潟らしい風景も楽しめる。

「場所性が大事で、そこでしか成立し得ない作品を作っていたら、手間も時間もかかりすぎ、人との関わりも出てきます。大変だけれど幸せな出会いとなります」

2つ目の柱は市民プロジェクト。「芸術祭を支えていくのは新潟市民。どんな切り口でも構わないので、水と土にいがたに連なるテーマで、その地域ならではの取り組みをやっていたと思います」。企画段階で芸術祭の主旨を理解し、作り上げていく。芸能、アート、食、おもてなし、まち歩きなど、まちづくりや地域の活性化に繋がりを、多岐に渡る活動だ。市民や地域、そして観光客が自ら参加できるプロジェクトとなっている。

3つ目の柱はシンポジウム。さまざまな視点で、自然との共生を考える連続シンポジウムを開催する。

「東日本大震災では地震、そして津波。これも水と土ではないかと考えました。自然は人間が征服できる、できないというものはなくて、もっと違った向き合い方があるのではないのでしょうか。今こそ、転換点として、未来を描くスタートラインに立ち直したいと思いました」

このシンポジウムを行うことで、芸術祭の思想的な部分、目指すもの、意図するものを多くの人が共有できるようにしている。



**シェアキッチン(2階)**  
 フードイベントやワークショップなどを開催。新潟の美味しい農産物などの味を再認識させるもの。取材した7月はかき氷。桃をどろどろに煮た濃厚シロップは最高の味。



**みずつつちカフェ(1階)**  
 新潟の食材を使ったオリジナルメニューが揃う。近所の農家で作った漬け物なども。明るく楽しいお店。気さくに話ができるのも魅力。



**新潟市内全域で約半年間も**

2009年に次いで2回目の開催となる今回は、新潟駅から徒歩でも来場できる距離にある万代島旧水揚場をメイン会場とした。新潟漁業協同組合の事務所や、巻き網などの機械を置いていた施設をそのまま活用することで、漁業(水)の記憶を背景に感じながら作品を巡ることができる。

そして、メイン会場の周辺を中心に、信濃川の川辺や海辺の公園、文化施設などに作品を展示。郊外でも田園やかつての排水機跡、里山などいろいろな景色を見ることが出来る。

また会期が非常に長い。夏に始まり冬に終わる。3つの季節にまたがるようなお祭りは少ないのではないか。

「作品のメンテナンスも必要となつてきますし、状況も変動しますが、その変化を見ることが出来るのも魅力」

屋外の作品については、一日のうちでも光の加減で表情が異なる。さらに暑い真夏、過ごしやすい秋、鉛色の曇天が続く初冬、雪の降りしきる真冬と新潟の四季の移ろいとともに趣を変えていく作品を楽しむことも出来る。

**私たちがどこから来てどこへ行くのか**

この先もこのまま行けば更に便利

に、そして安全になるのか。もしかしたら人類の持続可能で豊かな未来とあるのではないか。そういったことを考えさせる芸術祭。また、新潟市の独自性を発信していくお祭りは、地元の人でさえ忘れていたこと、気づいていなかったことを気づかせ、再発見させる。再発見することで地域の魅力を誇りに感じ、人に伝えていくものとなるであろう。

「今の時代は先が見えません。気持ちが悪いです。孤独死する人もいます。何が幸せで何が豊かなのか。先を示すものや気づかせるものがアートではないでしょうか。アートはよくわからないという人もいるけれども、こういう世の中の状況だからこそ、役に立たないものの役割が問われるのではないのでしょうか」

単純なアートイベントではなく、奥深い理念やテーマを持つている。多少時間はかかるかもしれないが、これから回を重ねることで、新潟市の水と土との関わりや芸術祭の存在意義が浸透していくことを祈る。

かくいう私も季節が変わる頃、アートと、新潟の水と土が生み出した美味しいお米を味わいにまた新潟に向かおうと思っている。



Water and Land - Niigata Art Festival  
 2012

コンサート、演劇、ダンス、ワークショップなど、多彩なイベントも行われる。ホームページや公式ガイドブックなどで興味のあるイベントを探そう!

<http://www.mizu-tsuchi.jp>

**市民プロジェクト**

市民の企画・実施による約150のプロジェクト。地域それぞれの特色を体感してみたいか?



●**プラニイガタ100(写真)**

市民による案内人こだわりのディープは新潟を歩くツアー

●**マップミーティング**

芸術祭作品マップ、おすすめルートなど

●**にいがた分水路webマップ**

新潟人に聞いた食事やおみやげなどの情報

●**Kid'sの陶板アート**

みなとトンネル壁面にさかなを形どった陶板を展示

●**亀田町役場の記憶**

土地改良の歴史を見てきた庁舎で水と土の空間を表現……など



## MLITレポート

全国各地で働く国土交通省職員が地元を紹介します。

Reporter

北陸地方整備局新潟港湾・  
空港整備事務所  
海務課長  
川瀬 和男



**新**潟は、信濃川と阿賀野川を利用した舟運で多くの物資が集まる湊まちとして古くから知られていました。江戸時代には、北前船の寄港地となり、全国の物産や文化、人々が行き交う、日本でも有数の賑わいでした。

信濃川の河口にある新潟港は、鎖国後、開港5港(横浜、函館、長崎、神戸)の1つとして1869年1月1日に開港しました。近年では、年間約3千万トンの貨物量を取り扱う本州日本海側最大の港に発展。国土交通省では、2011年11月に日本海側の総合的拠点港に選定しました。

新潟港開港150周年を迎える2019年に向けて、「湊まち新潟歴史ウォーク」というイベントをNPOの方と協働して行っており、今年で5年目となります。毎年4月に参加者を募集し、テーマを決めて年7回開催しています。新潟港や湊まち新潟の歴史についてボランティアガイドの説明を聞きながら新潟港周辺や下町、水路の散策、建物探訪などを行います。

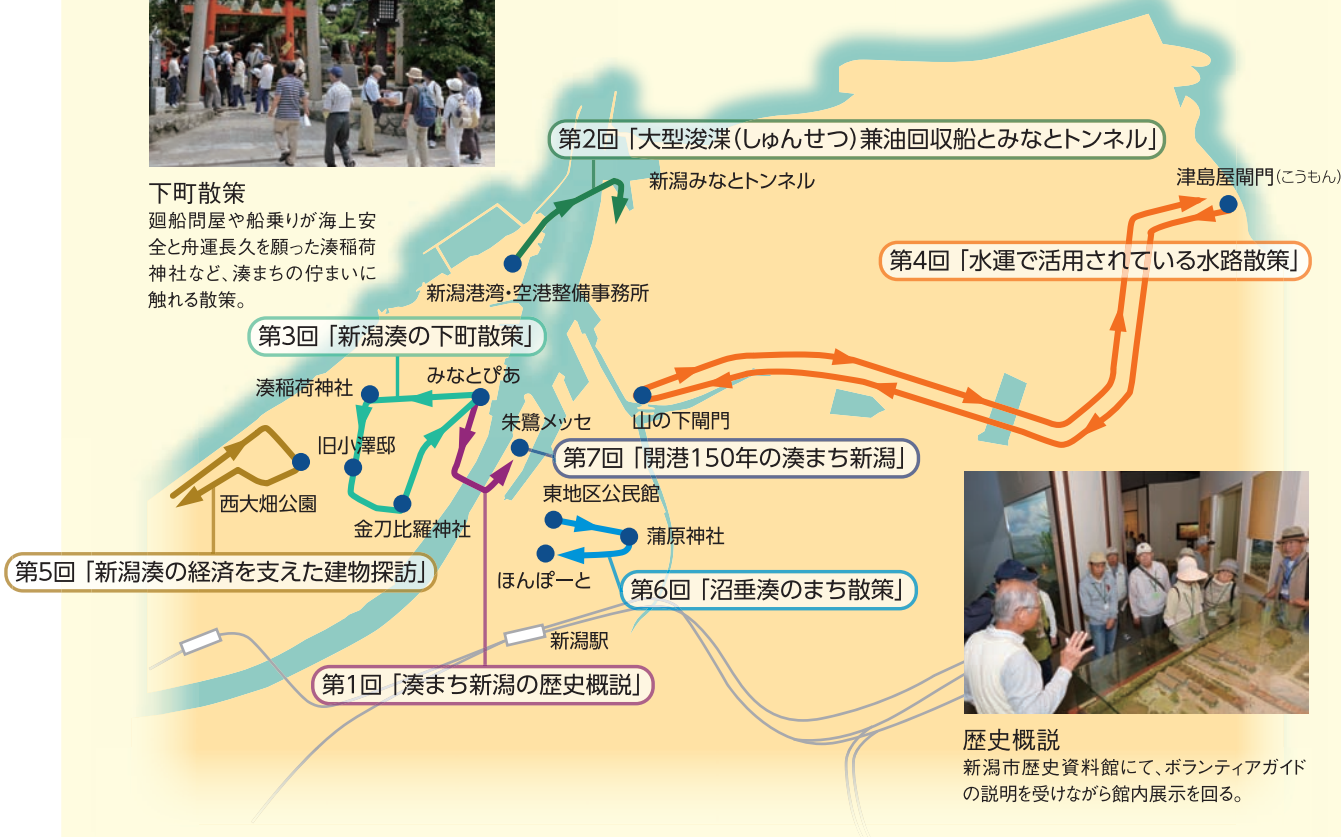
今年の募集はすでに終わっていますが、来年も開催を予定しています。湊まち新潟の歴史に触れて、関心と理解を深め、新潟の魅力を見つめ直す機会としてご参加ください。

### 「湊まち新潟歴史ウォーク2012」開催テーマ



#### 下町散策

廻船問屋や船乗りが海上安全と舟運長久を願った湊稻荷神社など、湊まちの佇まいに触れる散策。



#### 歴史概説

新潟市歴史資料館にて、ボランティアガイドの説明を受けながら館内展示を回る。